

- 開催期間 2000年4月4日(火)～7月2日(日)(78日間)
休館日 毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
- 展覧時間 午前9時30分～午後5時(入場は午後4時30分まで)
- 開催場所 大阪市立美術館(天王寺公園内)
大阪市天王寺区茶臼山町1-82 TEL: 06-6771-4874
- 総作品数 35点(フェルメールを含むデルフト派の作品)
- 主催 大阪市、毎日新聞社、毎日放送
- 後援 外務省、文化庁、オランダ大使館、蘭日交流400周年実行委員会、日蘭交流400周年記念事業日本側実行委員会、近畿2府4県、各府県教育委員会、大阪21世紀協会
- 総監修 アーサー・K・ウィロック Jr.



カラーで発想、エプソンです。



大判A1プラスプリントが
身近に。

EPSON

AT PLUS
1440dpi
PM-7000C



MAXART

セイコーエプソン株式会社

〒392-8502 長野県諏訪市大和三丁目3番5号



●交通のご案内
JR・地下鉄天王寺駅、近鉄あべの橋駅下車、天王寺公園内。公園入り口からご入園(入館)下さい。いずれの駅からも徒歩7分です。

大阪市立美術館(天王寺公園内)
Osaka Municipal Museum of Art
〒543-0063
大阪市天王寺区茶臼山町1-82
TEL: 06-6771-4874

日蘭交流400周年記念特別展覧会 フェルメールとその時代

Johannes



ヨハネス・フェルメール《若いターバンの少女(真珠の耳飾りの少女)》© Koninklijk Kabinet van Schilderijen Mauritshuis

Vermeer

大阪市立美術館

Osaka Municipal Museum of Art





日本とオランダ 交流の歴史

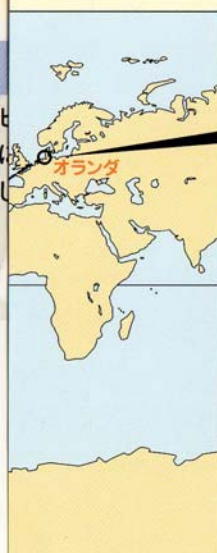
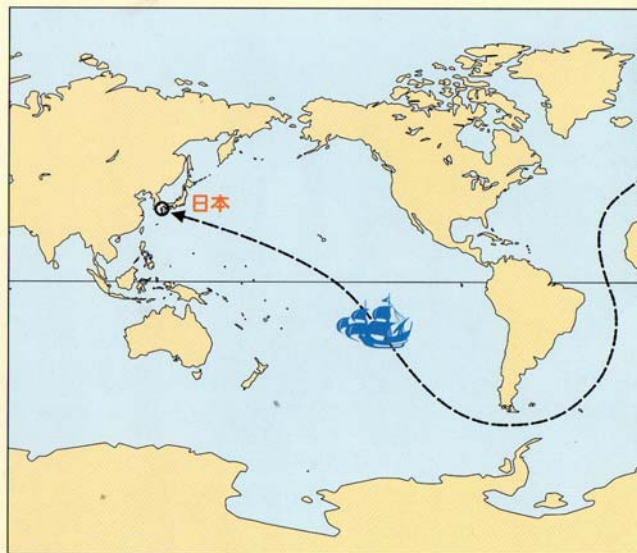


1600年4月19日、「デ・リーフデ号」というオランダの船が、九州の海岸にたどりつきました。ここから、日本とオランダは交流を始めました。

しばらくすると、江戸幕府が、「鎖国令」という法律によって外国とのやりとりを禁止しました。しかし、オランダだけは、日本と貿易をすることを許されたのです。江戸時代、日本はオランダによって外国のいろいろな学問や文化を知ることができました。そのような勉強

を蘭学^{らんがく}とよび、とくに大阪の「適塾^{てきじゅく}」では緒方洪庵^{おがたこうあん}という人が、たくさんの人びとに広め、福沢諭吉もここで学びました。

2000年は、日本とオランダが交流を始めてから400年になります。そこで、オランダとつながりの深い大阪では、フェルメールというオランダの画家の作品を集めた、「フェルメールとその時代」という展覧会が行われることになりました。



<オランダの概略>
正式国名 ネーデルラント王国
人 口 1560万人
面 積 41,526km²
(国土の4分の1は海面下)
首 都 アムステルダム
言 語 オランダ語



《^{せい}聖ブラクセデス》(1655年)
 フェルメールが、まだ若いころに描いた絵。ほかの絵と少しちがう感じがします。本当は、あるイタリアの画家の絵をうつして描きました。すばらしい絵をうつすことは、画家の勉強のひとつだったので。

《^{ちり}地理学者》(1668-9年頃)

ここは、この男の人の勉強部屋なんでしょう。机の上に広げているのは地図で、右手に持っているのはコンパスです。後ろの戸だなの上には、^{ちきゅう}地球儀がのっています。



© Gemeente Musea Delft, the Netherlands, Stedelijk Museum Het Prinsenhof

ダニエル・フォスマール

《^{かいりょう}空想の回廊のあるデルフトの眺望》(1663年)

フォスマールは、デルフトの町のけしきを描くのが得意でした。この絵の中には、遠くに教会や町の大きな建物が描かれています。これらの建物は、今でもデルフトに残っています。

「光の画家」フェルメール

ヨハネス・フェルメールは、今から370年ぐらい前に、オランダのデルフトという町で生まれた画家です。この画家は、部屋の中で、人びとが毎日の生活を送っているようすを描くのが好きだったようです。さて、フェルメールの部屋には、どのような人たちが描かれているのでしょうか。



© Städtisches Kunstinstitut, Frankfurt am Main Photo: Blaasi Gramm

《^{あおい}青いターバンの少女
(^{まひな}真珠の耳飾りの少女)》

(1665-66年頃)

声をかけられて、おもわずこちらをふり向いたみたいに見えます。少女が頭に巻いているターバンや、耳につけている大きな真珠は、昔のオランダでは、とてもおしゃれなものでした。青ときいろの色の組みあわせがとてもきれいです。



© Koninklijk Kabinet van Schilderijen Mauritshuis



The Metropolitan Museum of Art, Bequest of Collis P. Huntington, 1900 (05.110.24) Copyright © 1996 By The Metropolitan Museum of Art

デルフト派

昔、デルフトというところは、じゅうたんやビールを作る工場がたくさんあることで有名な町でした。ここでは、フェルメールのほかにも、たくさんの画家たちが集まり、自分たちの町のけしきや生活のようすなどを描きました。



© Gemeente Musea Delft, the Netherlands, Stedelijk Museum Het Prinsenhof

ヘンドリック・コルネリスゾーン・ファン・フリート

《^{ちんもくこう}ウィレム沈黙公の墓碑のあるデルフト新教会の内部》

フリートという画家は、教会の中を正しくていねいに描きました。自分がまるで教会の中をのぞいているような感じがします。この絵は、左の作品にでてくる教会の内部を描いているのです。



Widener Collection © 1999 Board of Trustees, National Gallery of Art, Washington

ピーテル・デ・ホーホ

《^{しんしつ}寝室》(1658-60年頃)

ベッドをきれいにしている女の人と、その仕事をみている女の子。デ・ホーホという画家は、女の人が、家事をしているところをたくさん描きました。オランダでは、家の中をきれいにすることは、とても大切なことでした。



Little Art Museum Gift of Samuel H. Kress Foundation

アブラハム・ファン・ベイエレン
《^{ごうが}豪華な食卓》

(1653-55年頃)

ベイエレンという画家は、テーブルの上に、きれいなコップやお皿、おいしそうなお料理、色とりどりの果物を、たくさん並べて絵を描きました。食器のつややかな感じを描くのがたいへん得意でした。

《^{てんびん}天秤を持つ女》

(1664年頃)

この女の人は、はかりを持ちながら、何を考えているのでしょうか。窓のカーテンが閉まっていて、部屋の中はとても暗く静かなようすですが、女の人のところだけは、明るく光っています。ふしぎな感じがする絵です。



Widener Collection © 1999 Board of Trustees, National Gallery of Art, Washington

《^{ちやうびん}リユートを調弦する女》(1664年頃)

この部屋には机といすがあり、かべには大きな地図がかけられています。窓からのやわらかい光が、楽器を持つ女の人を照らしています。フェルメールがこの絵のほかにも、左から光がさしこむ部屋を描いているのがわかりますか。